『一高寮歌解説書の落穂拾い』（その七十一）

詠帰会　森下達朗（一高同窓会会友）

243 第四十三回紀念祭寮歌『風荒ぶ』（昭８／大川榮作 作詞、佐伯貞雄 作曲）

【概説】『風荒ぶ』は、第43回（昭和８年）紀念祭寮歌の第一席（第二席は《愁ひに悲し』、第三席は『古りし榮ある』）に選ばれ、長く愛唱されてきた。

注① 一高一八会（昭18入学）の卒業五十周年記念文集のタイトルに、『風荒ぶ曠野の中に』が採用されている。

注② 村本周三氏（昭９文甲）は、『風荒ぶ』を名歌と位置づけ、「現」の章の詞句について、「さながら当時の一高キャンパスのスケッチだ」と評する《同氏『遠く過ぎにし日に』（『向陵』一高百二十五年記念号）》。

注③ 穂積重行氏（昭17文甲）は、『「混沌の思想の巷」に「今何を求めん」と歌う「風荒ぶ」から、「満州事変」「五・一五事件」と「ひた寄する時代の苦悩」を追体験することはもちろん可能』だとし、同年の東大寄贈歌『手折りてし』等とともに、「精神史」のドキュメントであると位置付ける《同氏『寮歌の時代』》。

注④ 井上司朗氏（大13文乙）は、『当時よく歌われた寮歌ときくが、詞章もよくこなせており、序章が特によい。「夢」の章は「先き行きし後をたどりて／吾も亦上り來りぬ／櫻吹雪き柏露す」あたり、よいムードがある。しかし、この寮歌の中心は「現」の章にあろう。「混沌の思想の巷／吾等いま何を求めん／若き兒は怖を知らじ／まことの炬胸に抱きつ」といいつつ、「いばら踏み波路おどりて／あけの鐘かきならす哉」とぼかしている』と評している《同氏『一高寮歌私観』》。

ちなみに、『風荒ぶ』は第一席に選ばれたのに、一高寮歌集においては、第43回紀念祭寮歌のトップに掲載されたことが一度もない。そのわけは、楽譜の分量が多いため、歌詞と楽譜が同一ページに入りきらず、ページ配分の都合が優先されたことによると思われる。

作曲について解説書は、「全体は四分の三拍子で統一しつつも、「序」と「結」の部分はAllegrettoで、中心の「夢」と「現」の部分はModeratoという具合に、テンポと旋律に変化を持たせることによって、魅力に富んだ調べを奏でており、寮生に愛唱された」とする。【森下注：「序」と「結」は変ロ長調、「夢」と「現」はト短調。】

①

序

「風荒ぶ曠野の中に
古木たゞ黙して立てり
吾等皆めぐりて唄はん
新しき芽枝に萠えたり」

【解説】「風荒ぶ曠野の中に」――「曠野」は、ひろびろとした野原。「風荒ぶ」は、当時の社会の動きをさす。

【私見】「風荒ぶ曠野の中に」――「曠野」は、時代の嵐の吹き荒ぶ日本そのものをさすのであろう。向ケ丘をさすとの説もあるが、「古木」という表現の解釈との整合性に疑問を残す。なお、次の寄贈歌は本寮歌を踏まえている。

▼「風すさぶ曠野に立ちて／氣を練りし夜は幾夜ぞ」《270『武藏野の』昭12東大》

「古木たゞ黙して立てり」――「古木」は、一高若しくは一高寄宿寮をさす。これは、「結」の章に「古き木や歴史の栄に／めぐる春四十有三」とあることからも知られる。一高を象徴する「柏の古木」と解するのが順当なところであろう。

▼「無言に憩ふ向陵の／柏の梢音もなく／魔性の如く立てる樹の」

《142『無言に憩ふ』大４》

▼「柏の幹は老ゆるとも／誕生るゝ子等の血は赤く」

《220『あこがれの唄胸に秘め』昭３》

ただし、「櫻の古木」である可能性も残る。

▼「彌生が丘に咲き誇る／櫻黙して語らねど／我等が幸を壽がむ……
老櫻に寄りて想ふ時／我等が行手光あり」《250『大風荒れて』昭10》
（注：謡曲『西行櫻』の故事を踏まえる。）

ただ沈黙して存在し続ける「古木」は、厳粛な雰囲気に満ち、摩訶不思議な力を持っているように感じられる。

「新しき芽枝に萠えたり」――卒業する先輩と入れ替わって一高に進学して來る新入生が一高の伝統を受け継いでゆくことをさすと解する。

【解説】「夢」の一節で、色あせた旅衣に喩えられるような、華美や享楽とは無縁な、地道で（だから「夜途」）真摯な真理探究を主眼とする一高に入学してから三年間の風趣もあり「夢」をもはらんだ自治寮の共同生活（「まどゐ」）を歌っている。

【私見】「旅衣いろはあせども／とはに歩む眞理の夜途」――眞理探究の道程が長くきわめて困難であることを、「色あせた旅衣」や「夜途」に喩えている。

▼「草枕いくつ重ねし／丘の上の眞理へのたび」《202『曉星の』大13》
「先き行きし後をたどりて／吾も亦上り來りぬ」――先輩たちの歩んだ道をたどって、自分も眞理を探究すべく一高に入学してきたのだ。

「夜をこめて響くまどゐの／歌枕夢をはらむか」――「夜をこめて」について、古語辞典では、「まだ夜の明けないうちに」という語釈しか載せていないのが普通だが、この寮歌では、「夜通し」の意で使われていると解する。「響く」のは「まどゐの歌」、すなわち寮生の集まりで歌われる寮歌。「歌枕」は「和歌に詠まれる名所や歌の題材」のことだが、ここでは、「寮歌を枕（前置き、よりどころ）にした夢を見る」ことを表現したものであろう。

《参考》「夜をこめて」の表現は、『百人一首』の次の歌で知られている。
▼「夜をこめて鶏の空音はかるとも世に逢坂の關は許さじ」（清少納言）
（『後拾遺和歌集』及び『枕草子』では、「空音に」に作る。）

この歌の「夜をこめて」を「まだ夜の明けないうちに」と解釈する注釈書が多いが、「深夜」、「夜通し」などの解釈もある。「ヨヲコメテ」の終了時点はヨノアク午前3時であることを意識して、「一晩中」、「夜通し」との口語訳をベターとする研究もある《『「夜をこめて」考』同志社女子大学教授小林賢章（同大学・学術研究年報第62巻2011年）》。

【解説】「現」の一節では、一転して、当時の日本の社会・国家が直面していた困難を極めた現実を、「ひた寄する時代の苦悩……いま何を求めん」との語句で提示しつつ、「若き兒は怖を知らじ　まことの炬胸に抱きつ」云々と、一高生の覚悟の程を詠み上げている。そこには、当時の反体制的革新思想への期待が暗に籠められているように思われるが、その内面は複雑だったにちがいない。

「ひた寄する時代の苦悩」――「時代の苦悩」は、当時の社会主義の動きと、それへの弾圧などによる思想上の悩みを指す。「向陵誌」にも昭和7年9月ごろ昭和8年の紀念祭にかけて多くの検挙者が出たことが記されている。

夢

「旅衣いろはあせども
とはに歩む眞理の夜途
先き行きし後をたどりて
吾も亦上り來りぬ
櫻吹雪き柏露す
明け暮れの丘の三年や
夜をこめて響くまどゐの
歌枕夢をはらむか」

現

「盛り上り伸び行く心に
ひた寄する時代の苦悩
混沌の思想の巷
吾等いま何を求めん
若き兒は怖を知らじ
まことの炬胸に抱きつ
いばら踏み波路おどりて
あけの鐘かきならす哉」

②

【私見】「現」の一節の歌詞については、テキストにより詩句の順序について奇妙な錯綜がみられ、三種類の歌詞（後出）が存在することに気付いた。錯綜が生じた経緯は未詳だが、ご存じの方があれば、ご教示願いたい。

「盛り上り伸び行く心に」――一高に入学して気分が高揚し、精神的な成長を遂げつつある一高生をさす。「心」は、通常「ムネ」と歌っているが、もともとは「ココロ」であったらしい。『一高同窓会「会報」第21号（昭8／1）』は「第43回紀念祭寮歌」として『風荒ぶ』のみについて歌詞と楽譜を掲載し、全歌詞を楽譜に割り付けているが、その中で「心」は「ココロ」と読ませている。

「まことの炬胸（ひ）に抱きつ」――眞理探究の志の燈を絶やすことなく。

▼「眞理を競ひ燈（ひ）を掲げ　萬巻の書を究めばや」《253『大海原の』昭10東大》

「あけの鐘かきならす哉」――新しい時代の夜明けを告げる鐘を鳴らす。

▼「いづれは若き男の子らの／あかつきの鐘つきならし／次なる時代（とき）の豫言する／端嚴（たゞ）しき姿我は見き」《220『あこがれの唄』昭3》

▼「苦悩を蹴りて勇ましく／時代の曉鐘かき鳴らせ」

《232『鯨波切りて』昭5東大》

『風荒ぶ』の「現」の一節（第三節）の歌詞の異同

A「混沌の思想の巷　吾等いま何を求めん
いばら踏み波路おどりて　あけの鐘かきならす哉
盛り上り伸び行く心に　ひた寄する時代の苦悩
若き兒は怖（おそれ）を知らじ　まことの炬胸（ひ）に抱きつ」《『一高同窓会「会報」』第21号（昭8／1）》

B「盛り上り伸び行く心に　吾等いま何を求めん
混沌の思想の巷　あけの鐘かきならす哉
若き兒は怖（おそれ）を知らじ　ひた寄する時代の苦悩
いばら踏み波路おどりて　まことの炬（ひ）胸に抱きつ」《『一高寮歌集』昭和8年版・同9年版》

C「盛り上り伸び行く心に　ひた寄する時代の苦悩
混沌の思想の巷　吾等いま何を求めん
若き兒は怖（おそれ）を知らじ　まことの炬（ひ）胸に抱きつ
いばら踏み波路おどりて　あけの鐘かきならす哉」《『一高寮歌集』昭和10年版～平成16年版》

結

「古き木や歴史の榮に
めぐる春四十有三
友よいざ共に舞ひて
花咲かせ紀念の祭」

【解説】「結」の一節については言及なし。

【私見】「古き木や歴史の榮に／めぐる春四十有三」――「古き木」は、「序」の「古木」のことで、一高寄宿寮をさす。

「花咲かせ紀念の祭」――第四十三回紀念祭を盛大なものにしよう。

以　上

（平成二十七年三月）

③